

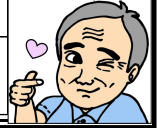
国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: 読書 読み取り

年 組 番

氏名



オツベルと象

オツベルと象

宮沢賢治

……ある牛飼いが物語る。

第一日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。稲こき機械の六台も据えつけてのんのんのんのんと、おそろしい音をたててやっている。

十六人の百姓どもが、顔をまるつきり真つ赤にして足で踏んで機械を回し、小山のように積まれた稲をかたづけしからこいていく。わらはとんどん後ろの方へ投げられて、また新しい山になる。そこらは、もみやわらから立った細かなちりて、変にぼうつと黄色になり、まるで砂漠の煙のようだ。

その薄暗い仕事場を、オツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吹き殻をわらに落とさないよう、目を細くして気をつけながら、両手を背中に組み合わせて、ぶらぶら行ったり来たりする。

小屋はずいぶん頑丈で、学校ぐらいいもあるのだが、なにせ新式稲こき機械が、六台もそろって回っているから、のんのんののんふるうのだ。中に入るとそのために、すっかり腹がすくほどだ。そして実際オツベルは、そいつで上手に腹を減らし、昼飯時には、六寸ぐらいのピフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのを食べるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんやっていた。そしたらそこへどういわけか、その、白象がやってきた。白い象だぜ、ペンキを塗ったのでないぜ。どういわけで来たかかって？ そいつは象のことだから、たぶんぶらぶらと森を出て、ただなにとなく来たのだらう。

そいつが小屋の入り口に、ゆっくり顔を出した時、百姓どもはぎよつとした。なぜぎよつとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないじゃないか。かかり合つては大変だから、どうも皆、一生懸命、自分の稲をこいでいた。

ところがその時オツベルは、並んだ機械の後ろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらりと鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、なんでもないとこいつで、今までどおり行ったり来たりしていたもんだ。

すると今度は白象が、片足床に上げたのだ。百姓どもはぎよつとした。それでも仕事に忙しし、かかり合つてはひどいから、そつちを見ずに、やっぱり稲をこいでいた。

オツベルは奥の薄暗い所で両手をポケットから出して、も一度ちらつと象を見た。それからいかにも退屈そうに、わざと大

きなあくびをして、両手を頭の後ろに組んで、行ったり来たりやっていた。ところが象が威勢よく、前足二つ突き出して、小屋に上がつてこようとする。百姓どもはぎよつとし、オツベルも少しぎよつとして、大きな琥珀のパイプから、ふつと煙を吐き出した。それでもやっぱり知らないふうで、ゆっくりそこら歩きを歩いていた。

そしたらどうとう、象がこのこ上がつてきた。そして機械の前のとこを、のんきに歩き始めたのだ。

ところがなにせ、機械はひどく回つていて、もみは夕立かあられのように、パチパチ象に当たると、象はいかにもうるさいらしく、小さなその目を細めていたが、またよく見ると、確かに少し笑っていた。

オツベルはやつと覚悟を決めて、稲こき機械の前に出て、象に話をしようとしたが、その時象が、とてもきれいな、うぐいすみたいないい声で、こんな文句を言ったのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂が私の歯に当たると、全くもみは、パチパチ、パチパチ歯に当たり、また真つ白な頭や首にぶつかる。」

「さあ、オツベルは命がけだ。パイプを右手に持ち直し、度胸をすえてこつた。」

「どうだい、ここはおもしろいかい。」

「おもしろいねえ。」象が体を斜めにして、目を細くして返事した。

「ずつとこつちのいたらどうだい。」

百姓どもははつとして、息を殺して象を見た。オツベルは言つてしまつてから、にわかにながたがた震えだす。ところが象はけろりとして、

「いてもいいよ。」と答えたもんだ。

「どうか。それではどうしよう。そういうことにしようじゃないか。」オツベルが顔をくしくしくして、真つ赤になつて喜びながらそう言つた。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、働かせるか、サーカス団に売り飛ばすか、どつちにしても万円以上もうけるぜ。

第二日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。それにこの前稲こき小屋で、うまく自分のものにした、象も実際たいしたもんだ。力も二十馬力もある。だいち見かけが真つ白で、牙は全体きれいな象牙でできている。皮も全体、立派でじょうぶな象皮なのだ。そしてずいぶん働くもんだ。けれどもそんなに稼ぐ

のも、やっぱり主人が偉いのだ。

「おい、おまえは時計はいらんのか。」丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀のパイプをくわえ、顔をしかめてこつた。

「僕は時計はいらんよ。」象が笑つて返事した。

「まあ持つてみる、いいもんだ。」こつた言ながらオツベルは、ブリキでこえた大きな時計を、象の首からぶら下げた。

「なかなかいいね。」象も言つた。

「鎖もなくちゃだめだらう。」オツベルときたら、百キロもある鎖を、その前足にくつつけた。

「うん、なかなか鎖はいいね。」三足歩いて象が言つた。

「靴を履いたらどうだらう。」

「僕は靴など履かないよ。」

「まあ履いてみる、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張り子の大きな靴を、象の後ろのかかとはにはめた。

「なかなかいいね。」象も言つた。

「靴に飾りをつけなくちゃ。」オツベルはもう大急ぎで、四百キロある分銅を、靴の上から、はめ込んだ。

「うん、なかなかいいね。」象は二足歩いてみて、さもうれしそうにそう言つた。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とは破け、象は鎖と分銅だけで、大喜びで歩いておつた。

「すまないが税金も高いから、今日はすこし、川から水をくんでくれ。」オツベルは両手を後ろで組んで、顔をしかめて象に言つた。

「ああ、僕水をくんでこよう。もう何杯でもくんでやるよ。」象は目を細くして喜んで、その昼過ぎに五十だけ、川から水をくんできた。そして菜葉の畑にかけた。

夕方象は小屋にいて、十把のわらを食べながら、西の三日の月を見て、

「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さっぱりするねえ。」と言つていた。

「すまないが税金がまた上がる。今日はすこし、森から薪を運んでくれ。」オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしに突つ込んで、次の日象にそう言つた。

「ああ、僕薪を持つてこよう。いい天気だねえ。僕はぜんたい森へ行くのは大好きなんだ。」象は笑つてこつた。

オツベルは少しぎよつとして、パイプを手から危なく落とすそつちにしたが、もうその時は、象がいかに愉快なふうで、ゆつくり歩きだしたので、また安心して、パイプをくわえ、小さなせきを一つして、百姓どもの仕事のほうを見に行つた。

その昼過ぎの半日に、象は九百把薪を運び、目を細くして

国語学習プリント

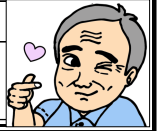
date: 年 月 日

学習内容: 読書 読み取り 続き

年 組 番

オツベルと象

氏名



喜んだ。
晩方象は小屋にいて、八把のわらを食へながら、西の四日の月を見て、
「ああ、せいせいした。サンタマリア。」と、こう独り言したそのだ。
その次の日だ。

「すまないが、税金が五倍になった。今日はすこし鍛冶場へ行って、炭火を吹いてくれないか。」
「ああ、吹いてやろう。本気でやったら、僕、もう、息で、石も投げ飛ばせるよ。」

オツベルはまたどきどきとしたが、気を落ち着けて笑っていた。象はその鍛冶場へ行って、べたと足を折って座り、ふいこの代わりに半日炭を吹いたのだ。
その晩、象は象小屋で、七把のわらを食へながら、空の五日の月を見て、
「ああ、疲れたな、うれしな、サンタマリア。」と、こう言った。どうだ、そうして次の日から、象は朝から稼ぐのだ。わらも昨日はただ五把だ。よくまあ、五把のわらなどで、あんな力が出るもんだ。

実際、象は経済だよ。それというのもオツベルが、頭がよくて偉いたためだ。オツベルときたらたいしたものぞ。
第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、俺も言おうとしてたんだが、いなくなつたよ。
まあ落ちて聞いて聞きたまえ。前に話したあの象を、オツベルは少しひどくすきた。仕方がだんだんひどくなつたから、象がなかなか笑わなくなつた。ときには赤い竜の目をして、じつとこんなにオツベルを見下ろすようになってきた。

ある晩、象は象小屋で、三把のわらを食へながら、十日の月を仰ぎ見て、
「苦しいです。サンタマリア。」と言つたということだ。こいつを聞いたオツベルは、ことごとく象につらくした。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、わらも食はずに、十一日の月を見て、
「もう、さようなら、サンタマリア。」と、こう言った。
「おや、なんだって？ さよならだ？」月がにわかに象にきく。
「ええ、さよならです。サンタマリア。」

「なんだい、ならばかり大きくて、からつきし意気地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月が笑つてこう言つた。

「お筆も紙もありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しくしくしく泣きだした。
「そら、これでしよう。」すぐ目の前で、かわいい子ども声のした。象が頭を上げて見ると、赤い着物の童子が立つて、すずりと紙をさき上げていた。象は早速手紙を書いた。
「僕はすいぶんめに遭つてゐる。みんな出てきて助けてくれ。」
童子はすぐに手紙を持って、林の方へ歩いていった。

赤衣の童子が、そうして山に着いたのは、ちょうど昼飯頃だった。この時、山の象どもは、沙羅樹の下の暗がり、暮などをやっていたのだが、額を集めてこれを見た。
「僕はすいぶんめに遭つてゐる。みんな出てきて助けてくれ。」
象は一斉に立ち上がり、真っ黒になつてほえたした。
「オツベルをやつてやろう。」議長象が高く叫ぶと、
「おう、出かけよう。グララアガア、グララアガア。」みんなが一度に呼ぶ。

さあ、もうみんな、嵐のように林の中を鳴き抜けて、グララアガア、グララアガア、野原の方へとんでいく。小さな木などは根こぎになり、やぶやなんかもめちやめちやだ。グワアグワア、グワアグワア、火花みたいに野原の中へとび出した。それから、なんの、走つて、走つて、どうとう向こうの青くかすんだ野原の果てに、オツベルの屋敷の黄色な屋根を見つけて、象は一度に噴火した。

グララアガア、グララアガア。その時はちょうど一時半、オツベルは皮の寝台の上で昼寝の盛りで、からすの夢を見ていたもんだ。あまり大きな音なので、オツベルの家の百姓どもが、門から少し外へ出て、小手をかざして向こうを見た。林のよう象だらう。汽車より速くやつてくる。さあ、まるつきり、血の気もうせて駆け込んで、「だんなあ、象です。押し寄せました。だんなあ、象です。」と、声を限りに叫んだもんだ。
ところがオツベルはやつぱり偉い。目をぱちりとあいた時は、もうなにもかもわかつていた。

「おい、象のやつは小屋にゐるのか。いっ？ いっ？ いっ？ のか。よし、戸を閉める。戸を閉めるんだよ。早く象小屋の戸を閉めるんだ。ようし、早く丸太を持ってこい。閉じこめちやえ、ちくしよめじたばたしやがるな、丸太をそこへ縛りつけろ。何ができるもんか。わざと力を減らしてあるんだ。ようし、もう五、六本、持ってこい。さあ、だじしようぶだ。だじしようぶだとも、慌てるなつたら、おい、みんな、今度は門だ。門を閉める。かんぬきをかえ。突っ張り。突っ張り。そうだ。おい、みんな心配するなつたら、しっかりしろよ。」オツベルはもう支度が出てきて、ラッパみたいないい声で、百姓どもを励ました。ところがどうして、百姓どもは気が気じゃない。こんな主人に

巻き添えなんぞ食いたくないから、みんなタオルやハンケチや、汚れたような白いようなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をする印なのだ。
オツベルはいよいよ躍起となって、そこら辺りを駆け回る。オツベルの犬も気がたつて、火のつくようにほえながら、屋敷の中をはせ回る。

まもなく地面はぐらぐらと揺られ、そこらばしやばしや暗くなり、象は屋敷を取り巻いた。グララアガア、グララアガア、その恐ろしい騒ぎの中から、
「今助けるから安心しろよ。」優しい声も聞こえてくる。
「ありがとう。よく来てくれて、ほんとに僕はうれしよ。」象小屋からも声がする。さあ、そうすると、周りの象は、いっそうひどく、グララアガア、グララアガア、塀の周りをぐるぐる走つてゐるらしく、たびたび中から、怒つて振り回す鼻も見える。けれど塀はセメントで、中には鉄も入っているから、なかなか象も壊せない。塀の中にはオツベルが、たつた一人で叫んでいる。百姓どもは目もくらみ、そこらうろろろするだけだ。そのうち外の象どもは、仲間の体を台にして、いよいよ塀を越しかかる。だんだんに、ゆうと顔を出す。そのしわくちやで灰色の、大きな顔を見上げた時、オツベルの犬は気絶した。

さあ、オツベルは撃ちだした。六連発のピストルを。ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア。ところが弾は通らない。牙に当たれば跳ね返る。一匹なぞはこう言つた。
「なかなかこいつはうるさいねえ。パチ、パチ、顔へ当たるんだ。」
オツベルはいつかどこかで、こんな文句を聞いたようだと思ひながら、ケースを帯から詰め替えた。そのうち、象の片足が、塀からこちへはみ出した。それからもう一つはみ出した。五匹の象がいつべんに、塀からどつと落ちてきた。オツベルはケースを握つたまま、もうくしやくくしやくに潰れていた。早くも門が開いて、グララアガア、グララアガア、象がどしどしなだれ込む。

「牢はどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マッチのようにへし折られ、あの白象は大変瘦せて小屋を出た。
「まあ、よかつたね、瘦せたねえ。」みんなは静かにそばに寄り、鎖と分銅をはずしてやつた。
「ああ、ありがとう。ほんとに僕は助かつたよ。」白象は寂しく笑つてそう言つた。

「まあ、川へはいつちやいけなかつたら。」

「まあ、川へはいつちやいけなかつたら。」

国語学習プリント

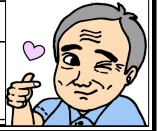
date: 年 月 日

学習内容: ワークシート2

年 組 番

オツベルと象

氏名



☆ 第二日曜までの語り手である牛飼いの価値観をおさえておこう

オツベルに対して: √

白象に対して: √

◎ 第五日曜

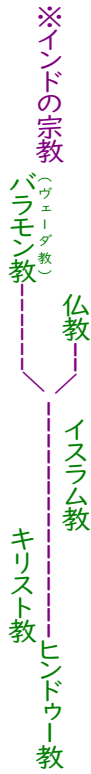
▼ オツベルは少しひどくすぎたために、白象はようになっていったのか。

▼ ぐらぐら倒れて地べたに座った白象に助言を与えたものは(二人)

◦ この二人について

サンタマリア=聖母マリア
赤衣の童子=善膩師童子

善膩師童子は仏教の毘沙門天と吉祥天(ヒンドウ教ではヴィシュヌ神と女神ラクシュミー)の五人の子供の末っ子。子宝・家族の和を深める神。



神の使いの手助けによって手紙を書く白象

[Wikipediaより抜粋] 宮沢賢治は、若い頃に父の影響で浄土真宗の門徒であったが、後に法華経を重視する日蓮宗系の国柱会の信者となった。彼はキリスト教にも少なからず好感を抱いており、宣教師のいるキリスト教会に通ったり、無教会派のクリスチャンと親交を深めたりしていた。

《先生の見解》白象はキリスト教信者ではなく、ましてや仏教徒でもない。

白象は純粹無垢な汚れ無き存在と思われるところから、何にも染まっていない無宗教としての存在である。この二人が出てきた理由は、信者であるなし、信じているかないか、正しいかどうかにも関わらず、誰しもが神とあがめてしまっているものが自然にあるということを表しているのだから。

▼ 白象の手紙 内容

▼ 白象からの手紙を読んだ仲間の象たちの反応

▼ 目をぱちちりとあいた時は、もうなにもかもわかってた。何をわかってたのか

▼ わざと力を減らしてあるんだ。とは、どういうことか。

▼ オツベルはいつかどこかで、こんな文句を聞いたようだ。その文句とは

▼ 【重要】白象は寂しく笑ってそう言った。
なぜ、寂しい笑いののか。(寂しい笑いにこめられた気持ちを推測しよう)

▼ おや、川へはいつちやいけないいたら。とは、

ほんとうの幸いとは何か? 「銀河鉄道の夜」とあわせ、本当の宗教、人のあり方を考えてみるとよいでしょう。J.S オツベルの宗教は何だろう。あえて言うなら先生は「経済教」かと思えます。あれ! 現代人は皆……。